

育児休暇を取得して

行橋支部 池邊 武*

出産の前の年から最長3年育児休暇が取得出来るようになったため、妻が先に1年取った後、2年間取得し、昨年5月に復帰しました。

育休取得の理由は、仕事の「多忙さ」が挙げられます。当時の職場は、定時に帰れることはまず無く、朝も7時過ぎには家を出ていましたし、土日祝日にも出勤することがありました。既に妊娠中だったにも関わらず出産前後の準備を全て妻に任さざるを得ず、妻には非常に負担をかけてしまいました。このままだと子供が生まれても、ろくに関われないな、という焦りが出てきました。逆に、仕事がこれほど過酷でなく、子供と過ごせるゆとりがあれば、育休は取っていなかったと思います。実は、育休取得を考えるまで、産休と育休の違いもわかっていませんでした。私の両親も共働きで、亡父は「男子厨房にいらず」タイプで、産後休暇しか取れなかった世代の母にあっては、「息子が育休をとったなんて恥ずかしくて友達に言えない」、と言ってはばかりない、そんな親に育てられていた訳で、まさか自分が育休を取るなんてことは、妻が妊娠するまでは全く考えていなかった、というのが本当のところでした。

さて、異動の前年度に妻が妊娠。丁度異動時期だったため、ヒアリングの際に、出産の1年後（妻の育休明け）から育休を取るのでも「迷惑にならない職場」への転勤を希望しました。「忙しくない職場はない。」と当然の如く言われましたが、それでも転勤・育休周知後1年以上たってからの育休だったので、取得にあたり、特に混乱はなかった、と思います。

いざ育児を始めると、大変さはある程度予想していたものの、一人遊びの出来ない1～2歳児と過ごす1日は非常に長く感じられました。いつの間にか育児休業の目的が、「子供と過ごす」ことより「如何に子供を早く、そして如何に長く昼寝をさせるか」に変わっていました。そのためにも、とにかく外に出て、たくさん遊ばせ、疲れさせるようにしていました。それでも育休後半には子供がなかなか昼寝をしなくなり、子供より先に自分が寝てしまうことも度々でした。

また、日々同じことの繰り返しで気分転換もできず気が滅入ることもありました。そんな気持ちを感じ取ってか、子供が言うことを聞かなかったり粗相をしたりして、酷く怒ってしまったこともあります。手を上げそうになったこともあります。幼児虐待は特別なことではなく、どこでも起こりうるものだと考えさせられました。

一方、よかったこととしては、子育てを通じて、地域の人達と知り合えたことです。月2回行われる区の子育て支援広場にも参加するようになると、店や道で会うと声をかけてもらえるようになり、休業前には知らなかった地域の人との交流を初めて実感

できてうれしかったです。

さて、復帰にあたり、2年も休職し、本当に仕事出来るのか。職員の大半が転勤し、うまくやっていけるのか。すっかり昼寝生活が身に付いてしまい、仕事についていけるか、と心配は尽きませんでしたが、男性の育休が報道でも頻繁に取り上げられるようになり、また同僚の中にも「育休を取りたい」と言う人がでてきたため、心強かったです。

確かに、育休で職場に迷惑はかかります。それは当然です。2年目以降は無給にもなります。しかし、そんな事を考えだしたら育休は取れません。育休で生じた欠員をきちんと補充するなど、取得しやすい環境を整えることが必要不可欠だと考えます。

私の育児休暇が、子供のためになったかは、甚だ疑問ですが、子供の成長を間近に見られ、2度とは戻らない大事なこの時期を一緒に過ごせたことは、自己満足に過ぎないにせよ、非常によかったと思います。

最後に、私が今も子育てを優先した生活を送れているのは、育休当時そして現在の職場の上司・同僚の理解と協力のお陰と感謝しています。この場をお借りしてお礼を申し上げます。

＊ 荏田港務所工務課